

# 満州引き揚げ体験 朗読劇

大石さん  
「忠実に再現してくれた」

記憶

戦後81年・四国

**語り継ぐ  
記憶**

戦後81年・四国

終戦直前、旧満州（現中国東北部）から母に抱かれ  
て帰国し、父が旧満州で戦死した大石綾子さん（81）の  
体験を描いた朗読劇が制作され、6日、高知市で披露  
された。自身も祖父がフィリピンで戦死した中岡美佳  
・県遺族会青年部副部長（63）が脚本を担当した。今後、  
学校などで披露していきたいとしており、関係者は「戦争に行かなくてはいけ  
なかった悲惨さと平和の尊さを感じてほしい」としている。（阿部大樹）

(阿部大樹)

## 県遺族会制作 高知で披露

大石さんは1945年1月、旧満州で生まれ、生後6か月で、母・千冬さんと共に美良布（現・香美市）に戻った。父の土居幸一郎さんは同年8月14日、旧満州で戦死。千冬さんはその

後、再婚し、大石さんは小学生の頃、実の父が戦死したことを知った。

「お父さん、緩子が来ました。いつかはお父さんが亡くなった所を訪ねたいと思ってきました」

朗読劇は、大石さんが94年に父が亡くなった中国東北部を訪れる場面から始まる。

このほか、千冬さんがおむつと食料を背中に大石さんを腹にくくりつけ、列車

や連絡船を乗り継いで日本を目指す様子や、大石さんが近所のおばさんとの何げない会話をきっかけに、実の父が戦死していたことを知る瞬間などが丁寧に描かれている。

6日、約40人を前に、青年部のメンバー5人が約15分かけて朗読。来場者はじつくりと耳を傾け、終了後は大きな拍手で包まれた。

戦争体験者や遺族の高齢

化が進む中、どのように継承していくかは大きな課題となっている。中岡さんは他県で戦争体験の朗読劇が作られていることを知り、「感情を込めて演じることができ、伝わりやすい」と青年部に提案。経験者でなければ語れないエピソードがあり、歴史的背景もうかがえるなどとして、大石さんの体験を、千冬さんの手記を基に、セリフや話の流れなどをできるだけ忠実に再現するよう心がけて制作にあたった。大石さんも私のこれまでの経歴を物語として、忠実に再現してくれて、（朗読劇の）台本を初めて見たときは涙が出た」と振り返る。

中岡さんは「今後、ほかの戦争体験者らの手記などを基に、新たな朗読劇も作り、戦争の悲惨さと平和の尊さなどを伝えていきたい」と話している。



上朗読劇を披露する県遺族会青年部のメンバーら  
下朗読劇の台本を見ながら話す大石さん（左）と中岡さん（いずれも高知市で）